

『大山寺縁起絵巻の世界』

神奈川県立公文書館資料課 川島 敏郎

はじめに ー私と伊勢原との関わりー

今を去ること31年前、私は新採用教員として神奈川県立厚木高等学校に赴任することになりました。その際、東京都世田谷区砧の同じアパートに住む友人から、「伊勢原市教育委員会に文化財担当職員の後輩がいるので、何か手伝ってもらえるとありがたいのだが…」との依頼を受けました。早速その職員に会って着手したのが、「伊勢原の古文書を読む会」（月1回）でした。次に手がけたのが「大山公民館夏期講座」（8月4回）で、この二つは今現在でも継続しています。このほかに伊勢原市からは文化財保護委員を、つい最近では「再発見大山道調査」の団長を委嘱され、このような奇しき因縁によって、調査の一応の締めくくりとして、皆様の前で表題に掲げたようなお話をするに至りました。

1 縁起とは何か？

「縁起」のもつ意味を辞書等で調べてみますと、次のようになります。

- ① 因縁生・縁生・因縁法ともいい、他との関係が縁となって生起すること。すべての現象は無数の原因（因）や条件（縁）が相互に関係しあって成立しているものであり、独立自存のものではない。
- ② 「因縁」とも訳され、お経や戒律の経典が作られた由来を説明した文章のこと。
- ③ 奈良時代の日本では、国家や豪族の直営事業として大寺院が建立され、財産台帳としての資財帳が備えられ、それには建物（伽藍）の設置された沿革を記した「縁起」が付属している場合が多かった。例えば、「元興寺縁起并流記資財帳」が挙げられます。
- ④ 寺院・仏像などの歴史・由来または利益・功德（りやく・くどく）の伝説。寺の草創の由来書。例えば、「北野天神縁起絵巻」・「石山寺縁起絵巻」などが挙げられます。
- ⑤ 俗に物忌み、断ち物などをし、あるいは事をなすにあたって吉凶を占うこと。

今日お話する内容は、①～⑤のうち、④に関わるものと考えてよろしいかと思います。

2 「大山寺縁起絵巻」の世界

（1）大山（寺）縁起の諸本

大山信仰が隆盛化した背景には、大山寺に関係した様々な縁起の民間への流布が介在したと思われます。当該縁起には、真名本と仮名本の二系統が存在します。これらがいつ頃作成されたかは定かではありません。しかし、金沢文庫所蔵の「長井貞秀書状」（資料1、『鎌倉遺文』第三十巻22910号文書、『伊勢原市史』資料編古代・中世105～106頁、87

号文書)によりますと、金沢称名寺第2代長老釵阿(けんあ)が、徳治2(1307)年と推定される年に大山寺に参詣し、その際に大山寺から縁起一卷(真名本と考えられます)を拝借して持ち帰り、それを長井貞秀(北条貞顕の従兄弟で幕府の引付頭人)が借用し、さらにはそれを南殿(みなみどの、北条貞顕の叔母、つまり自分の母)にもお見せしたいとの文書が存在しますから、少なくとも13世紀末～14世紀初頭段階には大山(寺)縁起が成立していたことは明らかです。ちなみに、須藤重雄(1826～1886)が嘉永2(1849)年に著した『阿夫利神社古傳考』では、縁起の成立時期を正応(1288～1293)以前としています。この2年前の弘安9(1286)年3月28日には、大山寺鉄鑄の不動明王の造立者として、また大山寺再興者として知られている胡桃山大楽寺・五峰山理智光寺(ともに廃寺)の開山である願行房憲静(1215～1295)が、大山寺の伽藍完成を祝して、審海(称名寺初代長老)・性海(薬師寺長老)等とともに大山寺で宮中雅楽(一説に鎌倉鶴岡八幡宮)の伶人(楽人)中原光氏らの指導の下、真言密教の仁和寺流の作法に則り舞楽曼荼羅供を供養しています(資料2・『伊勢原市史』同104頁)。これらのことを勘案しますと、願行憲静(がんぎょうぼうけんじょう)による鉄鑄不動明王像の造立、舞楽曼荼羅供の供養、推定ではありますが大山寺縁起の作成(縁起はしばしば寺社復興のための勧進の具として編纂されることが多い)は大山寺再興事業の一環であったのではないかと考えられます。

資料1 「長井貞秀書状」(金沢文庫所蔵 ~~~~~ 筆者)

此縁起南殿御方ニ可令入見参候敷、賀嶋
五郎左衛門下向之由承及候。必定候哉。
未被見來候。不審候。倉栖掃部助同下向
之由承及候。未被見來候。不審候。

一日給御文候之處、境節出仕候て、不申御返事候。
背本意候。大山御参詣候し之條、殊悦入候。彼御縁
起一卷借進之候。兼又三嶋御精進之間、心經法自明
日十五日分供料、沙汰進之候。又大般若一部供料、
同沙汰進之候。御轉讀候て、如例三嶋社御法楽候者
喜入候。心事期拜謁之時候。恐々謹言。

三月卅日 (長井) 貞秀

明忍御房(釵阿)

「 (切封墨引) (貞秀)

明忍御房 □□」

資料2 「聖教奥書」(金沢文庫所蔵)

右作法者、弘安九(1286)年三月二十八日被供養相模國大山
寺私記也。今作法依御流式、真言院憲静上人相談(中原)光
氏等日記、今作法就之被遂彼山供養之間、為當流故

實寫留之者也。

正安二年八月二日、於相州鎌倉赤橋邊越州禪閣（北条顕時）之
亭、挑殘燈兮降筆了。

金剛末資鋌阿 俗才二十

（花押）

小島瓊禮氏・佐伯英里子氏・鈴木良明氏らの研究に基づいて大山寺縁起関係資料の現存状況を示しますと、真名本は寛永十四（1637）年の年記を持つ『大日本仏教全書』を初めとする11点、仮名本は享禄五（1532）年の年記をもつ平塚市博物館本を初めとする13点、合計24点が確認されています。前・後者ともそれぞれの内容表記に若干の差異はあるものの、大概において内容構成そのものには大きな差異は認められません。

①真名本『大山（寺）縁起』から

真名本の記述内容は、後述する『大山寺縁起絵巻』と大きな差異は認められません。詳しい内容はそこで触れるとして、ここでは仮名本には全く触れられていない、修験者の修行空間を具体的に説明している部分（縁起本の後半部分）に着目して紹介することにします（原資料は漢文体で書かれているが、便宜上これを読み下しにしました）。

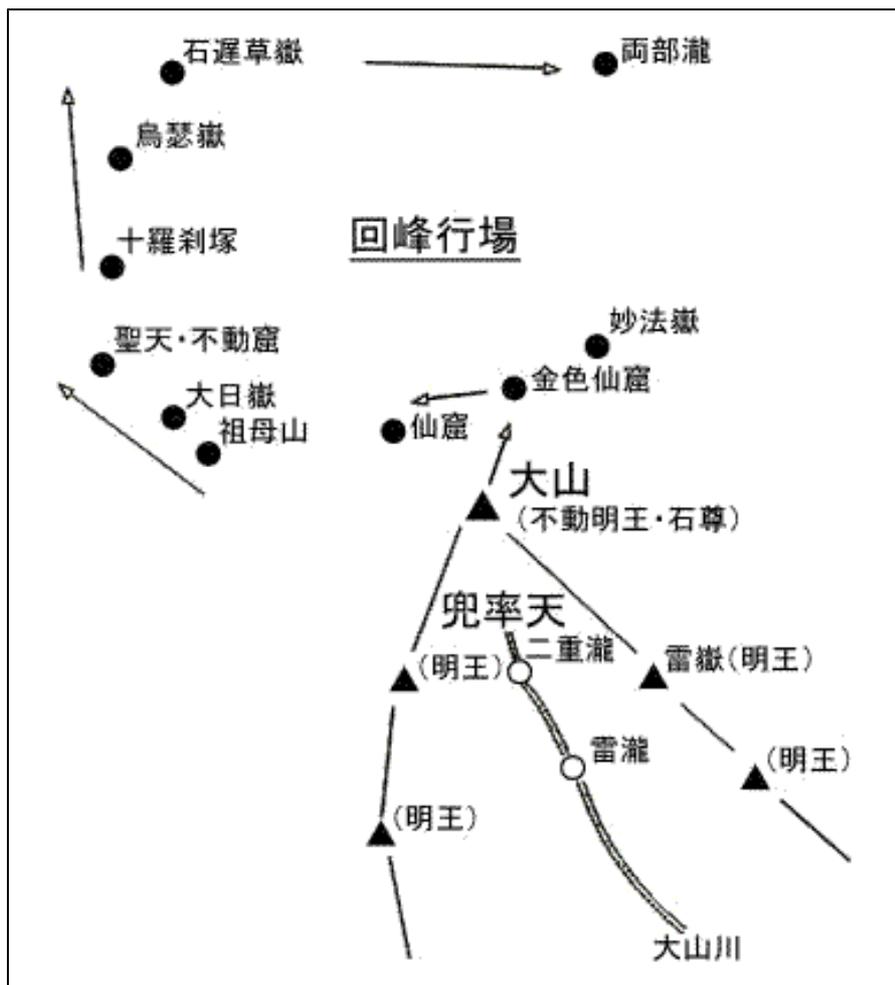
資料 3 『續群書類従』二七下所収「大山寺縁起」、阿夫利神社所蔵「大山寺縁起」、
『大日本仏教全書一二〇 寺誌叢書第四』（名著普及会刊）所収「大山縁起」等

（前略）当山は靈所・異迹おおし。**二重の滝**の下に滝あり、**雷の滝**といふ。滝の形みぞの如く浪を吐き、滝鳴れば雲起こる。崇めざる時は雨ふるなり。滝の前に方丈の異石あり。浪をはさみてあるに表に苔を生ぜず。石の面は粧いて銀鐙の如し。御坐石と名づく。龍神居る所の石なり。傍らに滝あり。五山周帀してたがいにそばたつ。**五大明王**を配す。その一は**雷岳**といふ。もし人これに登ればすなはち震死す。雷岳の下に岩窟あり。幽深にして奥を究むること能ふなし。蝙蝠岩屋といふ。翼を伏せむれ翔ぶ。よつてもつてこれを名づく。鐘あり、あるいは現はれ、あるいは失ふ。人語伝ふる古昔の四十九院の例あり。この鐘を動かし撞けば、同じ時の驚覚の鐘なり。本宮に化池あり。あるいは現はれ、あるいは失ふ。つねに神あり**石尊権現**と名づく。

本宮（大山頂）の東北に岩窟あり。**金色仙窟**と名づく。金色仙人の優遊するをもつてなり。五大明王、両界の大日岩窟に坐す。東に高山あり。**妙法巖**（大山嶺）と名づく。本願上人如法法華經一部を奉納せし故という。一仙人常に影向してこの岳に現れ法華を誦す。音声今に絶へず、時に聞こゆ。故に、西の下に**仙窟**ありという。諸山の遊栖の地なり。奇峰あり。**祖母山**（以下、丹沢表根〜丹沢山の記述）と名づく。常に仙人に遭ふ。遠からずして嵩あり。**大日巖**と名づく。次に岩窟あり。窟内に両部の大日坐す。次に聖天坐すところの深洞あり。南の下に高き岩あり。**不動窟**と名づく。次に塚あり。

十羅刹塚 (鬼ヶ岩か?) と名づく。仙人恒に顕現す。次に嵩あり。**烏瑟嶽** (毘ヶ岳) と名づく。次に嵩あり。**石遅草嶽** (仏殿山の山塊) と名づく。巖洞あり。その高さ三丈余り、岩戸前に石壇あり。壇上に三本の莽あり。左右にならび立つ。正身不動明王の坐あり。次に滝あり。**両部の瀧** (塩川瀧・愛川町) と名づく。山の北をはばみて滝あり。滝の高さ七丈余り、これは金剛界の滝となす。時々円光を放つ。胎蔵の滝に対して高き岩あり。下に仙窟あり、列真の都するところなり。振鈴の声あり。今に聞こゆ。岩窟あり、また靈石あり、五仏の形を表はす。或は華嚴般若の峰 (経ヶ岳・華嚴山の山塊)、或は法華方 (現在は「法華」と表記) 等の異岩 (経石) あり。神瑞を呈す。岩をして法をあらはさしむ。かくのごとき秘所、萬々相伝ふ。別に説あり。上人峰に登り、斗藪すること三十五日なり。当山明王の二童子守護神となる。衿迦羅童子は今の徳一宮なり。勢多迦童子は今の八大社なり。(後略)

山岳修験研究者の城川隆生氏の研究によると上に示した『大山縁起』の記事は、大山修験の修行空間を示しており、その範囲は大山山内に止まらず、丹沢山地をも包含した、かなり広域に亘る範囲であるという。『大山(寺)縁起』に基づいて氏が作成された「大山の聖域と回峰行場」を提示すると、下図の如くです。



(城川隆生 2007「地方霊山の入峰と寺社縁起ー丹沢と大山寺修験ー」『山岳修験』第 39 号)

②仮名本『大山寺縁起絵巻』について

『大山寺縁起絵巻』の平塚市博物館本は、上巻（詞書・絵画各 11）・下巻（詞書 13・絵画 12）二巻からなり、その制作年代は奥書に、「亨禄（享禄）五（1532）壬辰年菊月（九月）十三日」と記されています。また詞書は祐賢坊乗真（伊勢原市教育委員会本〈大津本ともいう〉）では齋藤一器外 1 名、藤沢市教育委員会本・旧大山寺本では橋盛林、内閣文庫本では当山〈大山〉寺務賢隆、町田市勝楽寺本では平岡伊織頼経）が書き記し、乗真はこの絵巻物を修験者と思われる大源坊（不明）・東学院（東学坊か）（伊勢原市教育委員会本では實蔵坊〈大山脇坊 36 坊の一つ、丸山要助〔要輔〕玄浄代、藤沢市教育委員会本では大山繁盛坊〈本山派・天台修験〉一代、勝楽寺本では法眼祐泉坊〈大山寺候人・承仕〉）に奉納・施入したことが判明します。さらに絵筆者については、伊勢原市教育委員会本に清水七之丞・清水七右衛門が掲載されるのみで、他の諸本においては全く不明です。

既述のごとく、本縁起は仮名本縁起絵巻 13 点の中でも最も古く、各縁起絵巻の内容構成にほとんど異同が認められないので、後世の江戸時代以降の大山寺縁起絵巻（貞享元〈1684〉年制作の伊勢原市教育委員会本、元禄 12〈1697〉年制作の藤沢市教育委員会本など）の基準となったと考えられます。

（2）『大山寺縁起絵巻』の内容について

それでは、平塚市博物館本『大山寺縁起絵巻』上・下二巻を読み解きながら、大山寺開創に関わる靈験譚の概略を紹介することにしましょう。

上巻

昔、相模国（『七大寺巡礼私記』では近江国栗津、虎関師鍊『元亨釈書』では近江国志賀、一説に相模国）の国司に太郎大夫時忠（真名本・『東大寺要録』では漆屋太郎大夫時忠）という信仰心がとても厚い人物がいました。40 才になっても彼には子どもがなかったため、如意輪観音像を造立（真名本には記述なし）して、妻とともにこの尊像に子供が授かるよう一心不乱に祈念しました〔第 1 段〕。

ある夜のこと、時忠夫妻の夢の中に 80 歳ほどの老僧（霊山の釈迦）が現れ、弥勒菩薩の化身という法華経一巻を授けて、かき消すように姿を消しました〔第 2 段〕。

その後間もなく時忠夫妻には仏・菩薩の化身かと思われるほどの男子が誕生し、国中の人々からも大変な祝福を受けて大切に養育しました〔第 3 段〕。

ところが生誕から 50 日（伊勢原市教育委員会本・藤沢市教育委員会本などでは 70 日、真名本では 50 日）後、乳母が野原に出て赤子の湯浴みをしている隙に、飛来して来た金色の鷲にさらわれました。夫妻は悲嘆に暮れつつも四方八方に手を尽くして必死に赤子を尋ね求めましたが、その行方は杳として知れませんでした〔第 4 段〕。

その頃、奈良の都に顕密の碩学で知られる一人の学僧がおり、その名を覚明（真名本では学明、『元亨釈書』・『東大寺要録』では義淵）上人といました。彼はある時、当来導師弥勒菩薩が来臨して仏法を弘めて大伽藍を建立する夢を見ました。夢から覚めて深山に分け入り大きな楠木（伊勢原市教育委員会本では杉木、真名本では櫟〈いちい〉樹）を見上げると、その枝の隙間に赤子の泣き声を聞きました。立ち寄って見ると、金色の鷲が巢

の中に赤子を懐いていました。赤子を奪い取ろうとしましたが、鷲が抵抗したため手に入れることはできませんでした〔第5段〕。

そこで覚明上人は念持仏の不動明王に「自分が夢見たことが真実であるならば、この子を五体満足にして取り戻し給え」と7日間祈念したところ、翌朝に1匹の猿（平塚市博物館本・伊勢原市教育委員会本のみ）が現れ、上人にその子を手渡しました。受け取ってみると、その子は錦の産着を纏い、その裏には誕生の年月が記してあることから父母のいることを知り、いろいろと尋ねてみましたが捜し出すことはできませんでした。その間、覚明上人はこの子を父母のように大切に養育し、その因縁により「金鷲童子」と呼びました〔第6段〕。

やがて「金鷲童子」が19歳に達した時、師匠の覚明上人は臨終を迎えることになりました。童子は金鼓を鳴らし、阿弥陀三尊が上人を来迎する最期の光景を見届け送りました〔第7段〕。

その後童子は、上人のため執金剛神像を造立し、これを本尊として「聖朝安穩、天下泰平、興隆佛法、利益衆生」をひたすら祈念しました。するとその信力が通じたか、本尊の脚に掛けていた五色の糸が天皇（聖武天皇）の王宮を照らしました。不思議に思った天皇は、勅使を派遣してその光源を探索させたところ、その光が執金剛神像の元から発していることを知りました。そこで勅使が童子にその理由を問いただすと、童子は「自分は興隆佛法の気持ちはあるものの自力ではどうしても適いがたいので、天皇のご威光を頼りに大伽藍を建立したい」との趣旨を伝えました〔第8段〕。

勅使が童子の意志を天皇に伝えますと、天皇は大変お喜びなられ、大急ぎで童子を召し上げ、「今まで自分も大願はあるものの、適切な仏教の師匠に恵まれなかった。今後はお前を師匠とし、その仏弟子となる」と告げられました。これを受けて童子は出家して良弁と改名しました。そうしているうちに、良弁は時の権威といい、仏道修行といい、何れも世に秀でていたので、東大寺（前身は金鐘寺、現東大寺法華堂《三月堂》）を建立し、その別当となりました。華嚴宗の確立はこの時点に始まります〔第9段〕。

一方、長い間愛し子を探し求めていた時忠夫妻は、住み慣れた家や財宝を捨て、郎従とも別れて諸国遍歴の旅に出ました。必死で艱難辛苦に耐えながら我が子に会えないことを嘆いてばかりいました〔第10段〕。

先ずは東国に心の赴くままに旅を続け、陸奥国と坂東との境の阿武隈川に至り、そこで旅人から我が子の情報を得るための手立てとして川の渡守をしました。ここで多くの年月を費やしましたが、何の成果を得られぬまま、渡守は止めることにしました〔第11段〕。

下巻

その後、時忠夫妻は東山道を経由して信濃国に出て、一旦相模国由井の里に帰還しました。昔住み慣れた場所を見る影もなく荒廃し、ただ涙にむせぶばかりでした。この地に止まることも致し方なく、西海道（九州）を目指して行くこととしました《第1段》。

西海道を目指して脚に任せて進むうちに、淀の渡しに到着しました。そこで便船を待つ船に乗ったところ、その渡守から「何かものを探しているのか」と質問されました。時忠は「私どもは相模国の住人ですが、生後70日（50日の誤り）にして我が子を鷲にさら

われ、その子供の行方を捜し求めて、生きている間に是非とも会いたくて諸国を遍歴しているのです」と語りました。すると、渡守は「今現在、奈良の都に聖武天皇の仏教の師匠として、東大寺の良弁僧正という方がいらっしゃる。その方は鷲の巢から取り出した人と聞いている。もしかしたら、この方こそ正にお前さんのお子さんではないのか。尋ねてみなさい」と話してくれました。これを聞くや否や、時忠夫妻は心騒ぎ胸も押し潰されるような思いで、急ぎ奈良の都へと向かいました《第2段》。

都に着いた時忠夫妻は早速東大寺の別当坊や稚児法師などに事の次第を話してはみるものの、至極冷淡な仕打ちを受けて門外に追い出されました《第3段》。

夫妻が大仏殿の南大門の傍らに粗末な小屋掛けをして臥していると、良弁がたまたま内裏への加持祈祷から帰還してきました。良弁は老人（時忠）の方から差し込む光に気が付いてその理由を尋ねました。そこで時忠は事の子細を懇切丁寧に説明したところ、左の脇の下にある三つの黒子や産着に記された誕生の年月などから、正しく探し求めていた我が子であると断定でき、ただひたすら涙涙の対面となりました《第4段》。

良弁親子の対面の風聞を耳にした聖武天皇は、直ちに昇殿して叡覧する許可を与えました。天皇は時忠に再び相模国の国司に就くことを命じられるとともに、良弁に両親とともに相模国への一時帰国をお認めになられましたが、高僧としての誉れが高いため相模国での仏法弘通と衆生利益を果たしたならばすぐに上洛することを命じられました《第5段》。

程なくして相模国鎌倉の由井郷に帰還した時忠は旧跡の地に屋形を造営し、在地の人々を招いて盛大な宴を催しました《第6段》。

ある時、良弁は庶人の協力を得て相模国内で仏法弘通・衆生利益のために相応しい場所を探し求めたところ、大きな山で山頂から光を発する山を発見するに至りました。ここでは放光山伝説が記述されていますが、これは古来山岳修験系の縁起によく採用される手法でもあります《第7段》。

良弁が先導して山頂に登り、発光する山頂を広さ約3丈（9m）・深さ約2丈（6m）ほど掘りますと、その中から不動明王の石像が出現しました。人々は、この不動明王の姿を見て目が眩み卒倒しますが、良弁の加持祈祷によって元のように蘇りました。その際、不動明王はこの山は弥勒菩薩の浄土（兜率天浄土）であると語りました《第8段》。

そこで、良弁が不動明王の姿態を石像から他の物に移しかえて末代の衆生利益を図ろうとしましたところ、山の南方にあった槻の大樹の枝が人が切り倒すが如く樹の根元へ落ちたかと思いきや、直ちに空に舞い上がって現在の金堂の前に落下しました。良弁はこの木こそ正に不動明王を移しかえる木として模刻を始めましたが、その相好（姿・顔かたち）が完成しないうちに不動明王の胸の辺りから乳（他の大山寺縁起絵巻諸本では血）が出て来ましたので、制作の手を休めました《第9段》。

その尊像の前で良弁が21日間にわたる祈願・祈誓を行いましたところ、忽然と四十九院（弥勒経に出てくる兜率天浄土という理想郷のことで、ここでは弥勒菩薩の化身をさす）も出現し、不動明王は12句の偈を説きました《第10段》

さらに良弁が金堂の乾（西北の方向）の谷にある岩窟の下の池の端で、7日間祈りを捧げたところ、池の中から大蛇が出現し、「自分は大山を守護する震蛇大王（真名本では深砂振邪大王）です。長い間荒神となって五濁（見・命・煩惱・衆生・劫濁の悪世）に染まり、仏教の心理を弁えないが故にこのような蛇身を受けることになってしまいました。今

現在、良弁上人の法施に預かることによって兜率天の内院に生まれ変わることができました。これ以降は大山に垂迹して大山寺を守護し、衆生を利益したい」と宣誓し、8句の偈を説きました《第11段》。

大蛇は大山に信仰心を寄せる人々に利益をもたらし、臨終の際には彼らを浄土に引導し、名利を追求して怠慢心を抱く者には罰を与えると約束しましたので、良弁は大蛇に参詣者の便宜を図って一筋の流水を下してくれるように懇願しましたところ、岩窟の頂から滝水を落としました《第12段》。

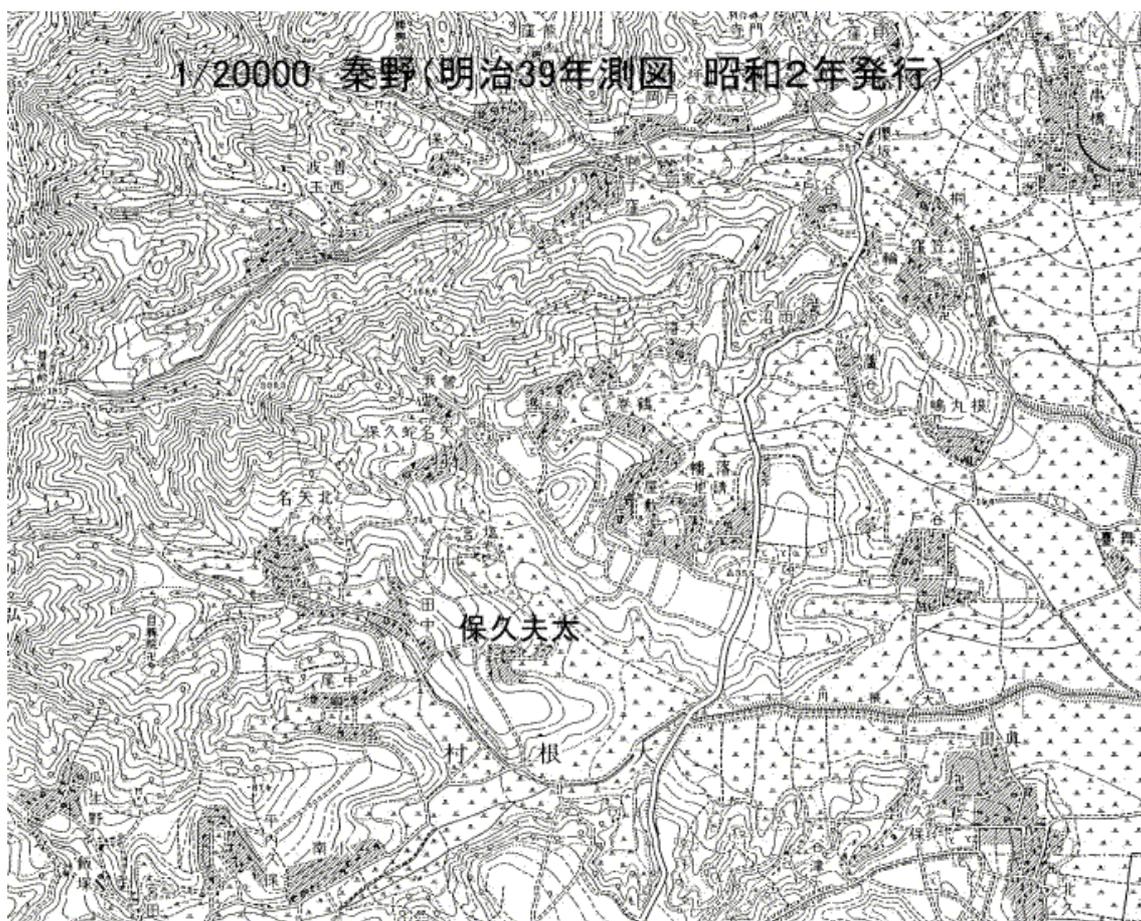
かくして、大山には次々と不思議な奇特の瑞相や生身の仏・菩薩が眼前に現出して、衆生を利益することは昔から今現在に至るまで明証することができます。また大山は日本第一山で、東・西・南・北の眺望に恵まれた景勝地であり、神仏の宿る神聖な山というに相応しい。金堂・鐘楼・経蔵・三重の塔・不動明王の社壇を初めとして諸仏が造立され、また弥勒菩薩に関係した兜率天浄土を象徴する四十九院の坊舎（弥勒兜率天浄土）が薨を並べ、軒を重ね、所々で座禅入定・学問修行の勤行は絶えることなく、出離解脱の霊地といった感があります。こうしているうちに、良弁の大山での滞留は3ヵ年に及びました。聖武天皇との約束期限も迫り、大山衆徒は評議を開き、良弁なき後の大山寺の繁栄と興隆仏法を維持・堅持することを懇願して公家（藤沢市教育委員会本・大山寺本は公家・武家、真名本は公家・天皇）へ奏請することを衆議一決しました。そしてさらに大山の様相や一々の奇特を天皇に奏上したところ、天皇も大変お喜びになられ、安房・上総・相模国の所領の一部を寺領とする旨の命令を下されました。この措置が講じられることによって、大山寺はますます繁盛し、仏法・王法ともに隆盛して天下泰平、国土安穩が達成されました。ある時、不動明王は良弁に託宣して、「日本国の大天魔は全て自分の支配下に収めました。天下が乱れ、国土が不穩となり、風・雨・水・火の災難が起こった時には、大山に参詣して加持祈禱をすれば、災難は速やかに減少し、国土安穩になるだろう」と語りました《第13段》。

3 太郎大夫時忠と良弁の出自をめぐって

『大山寺縁起絵巻』に登場する染屋太郎大夫時忠及びその子とされる良弁の出自については、既に指摘しておいたように、相模国説、近江国説、折衷説（相模国誕生・近江国移住）があり、またその俗姓についても、漆部氏説・百濟氏説、百濟系渡来人説と相分かれるところです。

『大山（寺）縁起絵巻』（真名本）には、「良弁者相模国鎌倉郡由伊（井）郷人也、俗姓漆部氏、当国良将漆屋太郎大夫時忠子也」と記載されています。また、建武4（1337）年の奥書をもつ「東大寺縁起絵巻」には、「良弁僧正者相模国大隅（住）郡漆窪云所ノ漆部ノ氏人也」とあり、さらに『東大寺要録』にも「僧正者相模国人漆部氏也」とあることから、良弁父子が相模国漆部氏と密接な関係を有する人物であるとともに、その存立基盤が鎌倉郡由井郷か大住郡漆窪の何れかに存在したと思われる。この両者を比較した時、良弁と大山寺との関係、父とされる人物の「漆部」という俗姓と地形・地名との関係、大山との至近距離にある立地条件、有力古墳の分布状況等々を考慮に入れますと、鎌倉郡由井郷よりも大住郡漆窪（秦野市北矢名付近には漆窪・大夫久保の字名が現存する）がにわ

かに注目されてきます。



ところで、良弁の父親とされる漆屋（一説に染屋・染谷）太郎大夫時忠とは一体いかなる人物でしょうか。これに比定される人物として、この当時に実在した漆部直伊波を挙げることができます。相模国の豪族である伊波と中央政府との関係を示す初見史料としては、『続日本紀』天平 20（748）年 2 月 壬戌（22 日）条が挙げられます。

資料 4

「壬戌。進知識物人等、外大初位下物部連族子嶋、外従六位下田（甲カ）可臣真東、外従初少位上大友國麻呂、従七位上柒（漆）部伊波並授外従五位下。」

『東大寺要録』の記録から推考しますと、この時の昇叙は東大寺の盧舎那仏（大仏）造立事業（743～752）に際して、10名の大量商布献上者の一人として、伊波自身が2万端もの商布を東大寺に寄進した行為の功績が認められたものであったことが判明します。この事実から、伊波が相模国において相当な経済力を保有する人物であるとともに、中央との密接な関係を保有する人物でもあったと推考して誤りないと思います。

その後の中央官人として転身して行く伊波の軌跡を、『続日本紀』に基づいて略年表化しますと、下記ようになります。

天平宝字 4（760）年 3 月	佐渡守に任命される。
天平宝字 6（762）年 4 月	賊贖正に任命される。

天平宝字 8 (764) 年 10 月	恵美押勝 (藤原仲麻呂) の乱鎮圧の褒賞として外従五位下より従五位下に叙される。
神護景雲 2 (768) 年 2 月 3 日	従五位下勲六等に叙され、「相模宿禰」への改姓賜与と同時に、「相模國々造」任命される。
神護景雲 2 (768) 年 7 月 17 日	右兵衛佐に任命される。
神護景雲 3 (769) 年 6 月 9 日	玄蕃助に任命される。因みに平城宮出土木簡の中に、「玄蕃口 (助) 相模伊波」が存在する。
宝亀 2 (771) 年 9 月 16 日	鼓吹正に任命される。
宝亀 5 (774) 年 4 月 24 日	尾張守に任命される。

上記の『続日本紀』による略年表で注目すべき記事は、恵美押勝 (藤原仲麻呂) の乱 (764 年) の鎮圧の功労者の一人として伊波が推挙され、朝廷から外従五位下から従五位下が賜与されたこと、それから 4 年後、従五位下勲六等に叙せられて「大夫」と称されるに相応しい位階が備わった上、「柴 (漆) 部伊波ニ相模ノ宿禰ヲ賜ヒ、相模国ノ国造ト為ス」との認証を受けるに至ったことでもあります。ここにみられる国造は大化前代のそれとは異なり、いわゆる「律令国造」或いは「令制国造」と呼称されるもので、この職掌には本国及びその出身者が一国一名任命され、その多くは神祇祭祀に従事した、との先学の指摘 (岡田精司「律令的祭祀形態の成立」、『古代王権の祭祀と神話』所収) もあり、伊波の宗教祭祀の執行も看過できないところです。

また、『東大寺文書』によると、伊波は大仏造立の際の寄進後、東大寺から摂津国西成郡美努郷の堀江川添 (難波津の交通の要衝) を買得しており、伊波の広範な交易活動の一端と、東大寺との密接な結び付きをも窺い知ることができます。

以上の考察から、「大山寺縁起絵巻」・「大山縁起」(真名本) などに登場し、良弁の父親とされる相模国の国司、漆屋太郎大夫時忠とは漆部直伊波その人であり、彼は直という大和政権下の姓をもつことから、旧相武国造の系譜を引く地方豪族で、相模国大住郡の大山周辺 (秦野市北矢名付近) に本貫地を有しながら勢力を伸張させ、やがて東大寺の盧舎那仏造立への寄進行為などを契機に中央への進出を試み、政治的・経済的・宗教祭祀的地位を確立していったものと考えられます。

おわりに

以上、大山 (寺) に関係した縁起を基に、その成立の背景と内容についてお話してまいりましたが、本縁起では大山寺の建立、不動明王像の造立に重点が置かれ、本尊の靈験譚については、ほとんど言及されていません。それを補強・具現化するものとして作成されたものが養智院心蔵『大山不動靈験記』(寛政 4 (1792) 年刊) であると考えられます。この両者を併せ考察することによって、大山信仰の一端を窺い知ることが出来るのではないかと思います。

〔本講演会は、平成 21 年 12 月 19 日 (土) に伊勢原市立公民館レクリエーション室で開催されました。この講演記録は、講師・川島敏郎先生に作成をお願いしたものです。〕